

昼間のきょうだい 夜のきょうだい

森末 哲朗

年が明けて間もない一月五日、ぼくはバイクで六甲ケーブル駅に向かう坂を登っていた。

その日、安藤夫妻の家で、どんぐりの運営委員のメンバーの新年会が開かれることになっていたのだ。阪神・淡路大震災の三年後くらいから始まり、

いまでは半ば恒例行事のように毎年開かれている。ケーブル駅に近づいた時、ヘルメットの風防に白

いものが貼りついた。

雪だった。

——寒いとおもったら、雪か。そういえば、今年はあまり地球温暖化の声が聞かれないな。寒い冬……。冬らしい冬……。

安藤夫婦の家の中では、温かい料理が待っていてくれた。こんな冷える日には、何はなくとも温かい

だけで十分御馳走だが、二人とも料理上手ときているから、旨さが胃袋に染み入るようだ。

二、三人、都合のつかない人もいたが、会が始まって三十分後くらいには、八人のメンバーが揃っていた。その多くの人たちとは、軽く十年を越える付き合いが続いている。

小さな学童クラブといえども、いざ運営するとなると、お金や人間関係のことでは、それなりに難しいこともあるのだが、そこを工夫しながらやりくりしてきた仲間たちだ。

どんぐりクラブという子どもの園は、必ずしも砂糖菓子で出来た甘いお城ではないことを、このメンバーは知っている。

ハイペースでグラスを空にしていく高こうさんに、ほくは話しかけた。

「アキヒロもなあ、あと三か月でどんぐり卒業や。

あいつがおらんようになったら、寂しなるわ」

まわりも相槌を打った。

六年生のアキヒロは、身体が大きくて、声も大きくて、いたずらが大好きで、チビたちの面見えもけっこういい子だ。

一年生のリホはアキヒロと同じマンションに住んでいて、小学生にあがる以前からアキヒロに可愛がってもらっていた。お母さんは専業主婦なので、学童保育の場として必ずしもどんぐりが必要としていたわけではなかったが、アキヒロのいるドングリでリホを大きくしたいと決心されたのだ。こんなことは滅多にあることではない。



入所を正式に申し込まれた日に、誰かが言った。
「あいつ、優秀な勧誘員やなあ！」

リホはいま三年生のミサの妹分になり、二人でいさえずれば何にも要らないというほどに仲睦まじく、毎日を過ごしている。アキヒロが卒業したあと、みんなとうまくやっていくだろう。

それにしても、あんな愉快な子が中学生になった途端に縁が薄くなるのでは、やはり寂しい。

「高さん、あ、あ、の話、実現させたいなあ」

酒をすすって、ほくは言った。

あ、あ、の話とは、高さんの父方の故郷、濟州島への旅のことだ。

朝鮮半島の南にぼっかり浮かんだ濟州島から、高さんの父は祖父と共に日本にやってきた。大阪、神戸を往き来するうち、彼は神戸の長田に根を下ろした。そこで高さんは生まれ育った。つれあいの梁さん

んもまた在日二世で、この二人の間にアキヒロが誕生したわけだ。

在日三世のアキヒロは、このところ、自分が日本人ではないということに、深く関心を寄せるようになった。そんな息子とともに、高さんは濟州島への旅を考えていたようなのだ。

昨年の秋だったろうか、高一のケースの父大西さんと、アキヒロの父高さんと、トシコの父安藤さんとぼくの四人で酒を呑んでいた時に、高さんが抑えた声で言った。

「ぼくねえ、濟州島に行きたい、思ってますわ」

一瞬、三人の男たちは彼の口元に視線を向けた。

「アキヒロも、連れてね」

……皆さんもどうですか、とは言わなかったが、聞いてしまった三人はおそらく同じ想いだっただけに違いない。

——その時は、一緒に行きたい。

新年会で再び「済州島ツアー」の話に花が咲いた。秋に聞いた時にはどこか思いつきのような臭いがしていたことが、こうして大勢の仲間と語っているうちに、それはいつか必ず実現されることのように思えてくるから不思議だ。酒がいくらかぼくたちを饒舌にさせていたのかもしれない。

ニューヨークのテロ事件に話は及び、もし日本と朝鮮半島との間にキナ臭い関係が生じたらというところまで話は発展していった。

理屈っぽい話あまり得意ではない大西さんが何かを言い、ぼくが、それはないやろうとちやちやを入れ、まわりの女性たちが笑う。

その大西さんが、しみじみした口調で言った。

「会社ではねえ、こんな風に、なんもかんもオーブ

ンに喋るいうことはないですよね」

これにはぼくも素直に首肯した。

アキヒロという一人の少年のことを語りながら、彼のどんぐりでの日常のみにとどまらず、彼がどこからやってきてどこへ行くかとしているのかというアイデンティティーの問題にまで、話は及んでいるのだから。

どんぐりでの六年間、本当に光り輝いて過ごしてきた少年が、おとなへの階段を昇っていく過程で、どんな逆風に出会うのか、できるものなら出会わないで欲しいと願わずにはいられないが、これからの国際政治がどんな障壁を仕掛けてくるのか誰にも予想はつかない。

でも、アキヒロの卒業を機に、これまでの縁がプツリと切れてしまうのではなく、こんな風に繋がってあれば、また何かが生まれるかもしれない。

濟州島への旅が、アキヒロとぼくたちの第二라운
ドのきっかけになってくれるだろう。

震災離婚

ビールばかりでは腹が張るとばかりに、酒に切り
替えた人、ワインを飲み始めた人、……寒い夜が更
けてゆく。

電話が鳴った。

安藤隆子さんが受話器をとる。しばらくお喋りを
していたようだが、「森末さん、電話よ」と、こち
らにチェンジすることになった。

「だれ？」

「山岡さんよ」

中学三年のシンジの母だった。

「明けまして、おめでとうございます」

「ああ、ほんまに、おめでとうございます」

「えっ!？」



「もう、聞いたよ。シンジから」

「そうなんですよ……。もっと早く言わなあかんと
思ってたんですけど……」

シンジの母は、照れ臭そうに笑った。

実は暮れにOB・OGの中高生やその親たちと忘
年会を持ち、その席でシンジが母の再婚の話をして
いたのだ。

ぼくが直接聞いたわけではなかったが、シンジの
隣の席に座っていた大西さんや高さんたちが聞いた
のだ。シンジがまだ小さかった頃、どんぐりで集ま
りがあると、シンジは座り心地の良い膝を探して
は、よくその中に座っていた。実の父はいなくて
も、ある意味ではどんぐりのお父さんたちが、シン

ジの父親がわりをしていたのだ。彼らの懐が深かったこともあるが、シンジが持っている生きる力とでもいふべき独特の人なつっこさが、男たちをおやじがわりに仕立てあげていたのかもしれない。

「あいつなあ、(母親の再婚を)嬉しそうに話したわ」

忘年会がはねて、おとなばかりで二次会をやっていた時に、その話を聞いた。

「—そうか。嬉しそうにしとつたか……」

まず、良かったと思つた。

次に、こんなことを思つた。

—あいつも、随分おとなになつたもんや。

まだ十五歳だというのに、母が好きになつた男と一緒にいることを、心から祝福している。えらいやつちゃ。辛い時期をくぐり抜けて、優しさを身につけたんや。

シンジの母は、照れながら言った。

「もう、籍は入れたんです。去年のうちに森末さんに言うとかな思たんですけど、……そうですか、……あの子が言うてましたか、……そやないかとは思てたんですけど、……ごめんなさいね、おそうなつて」

「あいつも、ええ男になりましたね。新しいお父さんが出来ることを、単純に喜んでるんやなしに、自分のお母さんがひとりの女として幸せになることを応援しとんですね」

「いやあ、そうでしょうか……。そこまで……。たしかに、あの子がねえ『年内に籍を入れた方がええ』いうて、強く言つたんですよ。それで、十二月の末に入籍したんです」

阪神・淡路大震災の年に、シンジの母は離婚した。シンジが小学三年生の時だ。

父のいないシンジは、どんぐりのお父さんたちの存在を、まるで父がわりのように自分にたぐり寄せ

て、少年としての骨格を作っていった。その当時、母親はこんな言葉を洩らした。

「わたしでは、手に負えなくて……。でも、皆さんのおかげでグレもせず、ここまで大きくしてもらいました」

母親思いのシンジは、母が身体を悪くした時などは、「重たいもん、オレが持ったらなあかんねん」と、近くのスーパーまでよく付き添っていた。中学生になって間もない頃のことだ。

「よう、育ったやん」

シンジを知るおとなたちは、彼の成長ぶりを一緒に喜んだ。

どんぐりのバザーなどにもよく顔を出し、朝早くから店出しの手伝いをし、最後の片付けまでしっかりと付き合いきる子だった。

間もなく中学生を終わり、四月からはどんな学校で高校生をしているのか誰にも分からないが、足元

の危うかったガキの時代を多くのおとなたちに支えてもらい、ここまで育ってきたのだ。この先、生きている限りは、つまづきはきつと待っているのだから、何も心配は要らない。あいつなら、きつと切り抜けていくだろう。

酔うほどに話題は広がり、時に亭主の悪口がとび出したり、嫁ハンの不足が嘆かれたり、その度に「よう、言うわ」と笑いとばし、酒がすすむ。

夜更けの道を単車を押して歩きながら、心地良い気分でこんなことを思った。

子どもは「昼間のきょうだい」、おとなは「夜のきょうだい」。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ)